



患者さまと市立小樽第二病院をつなぐ広報誌

しんらい

信 頼

第3号
2008年
1月

平成20年1月11日 市立小樽第二病院広報委員会 発行責任者：馬淵正二



症例検討

脳神経外科 医師を中心にスタッフ全員で治療に当たっています。

ごあいさつ

事務局長 さくらば ひろやす
桜庭 啓恭



市立小樽第二病院
は、市立小樽病院と
機能を分担し、脳神

経外科、循環器科(人工透析を含む)、心臓血管外科・外科、精神・神経科の診療科を持ち、小樽市民はもちろんのこと、後志地区住民の方々の健康維持のため、医療サービスを提供しています。

また、救急患者の受け入れ病院としても、大いに貢献しています。

しかし、開院してから30数年が経過し、建物の老朽化が著しいことから、市立小樽病院との新築統合に向けて計画を進めています。さらには医療の質のより一層の向上を図るために、病院機能評価の認証取得に向けて職員が一丸となって院内の問題点について整理し、順次改善を図っています。

今後とも、多くの皆さまに当院をご利用いただだけますよう、職員一同努力してまいりますので、よろしくお願いいたします。



【市立小樽第二病院 基本理念】

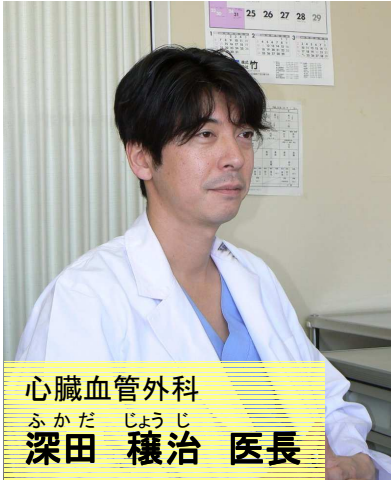
『市民本意の医療を行い、地域に根ざした市民に信頼される病院を目指します』

— 基本方針 —

- 1) 24時間365日、救急医療を積極的に推進します。
- 2) 安全な医療を提供できるように、職員の安全教育を強力に推進します。
- 3) 患者さまの人格、信条を尊重し、患者さまに優しい医療を提供します。

ドクターに聞く(2) かしへいそくせいどうみゃくこうかしょう 【下肢閉塞性動脈硬化症】

「足がだるくなって
休み休みでないと歩けなくなった。」
こんな症状はありませんか？
“足が衰えた？”とは限りませんよ。

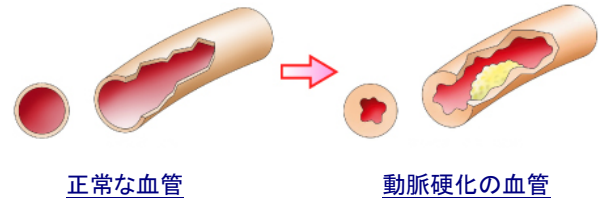


心臓血管外科
ふかだ じょうじ
深田 穰治 医長

Q1 下肢閉塞性動脈硬化症とはどのような病気ですか？

A 動脈硬化という言葉をご存知ですか？、何十年も使われた排水管を想像してみてください。内側が錆びて泥のようなものが付いて流れを悪くしています。

詰まって流れなくなってしまう場合もあります。動脈硬化の血管はまさにそのような状態です。



正常な血管

動脈硬化の血管

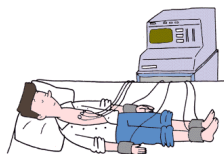
動脈硬化はゆっくり進みますので、知らないうちに進行していることがあります。足の血管に動脈硬化が進むと、歩いた時に筋肉（ふくらはぎや太もも）が酸素不足になります。歩くとだるいのはそのせいです。

Q2 どのような人がこの病気にかかりやすいですか？

A ①65歳以上の男性 ②愛煙家 ③糖尿病の人 ④血圧が高い人 ⑤コレステロール値の高い人
いくつ当てはまりますか？ 特に二つ以上当てはまる方は要注意です。

Q3 危険な病気なのですか？

A 動脈硬化は全身の動脈に起こります。足の血管に動脈硬化があるということは、心臓や脳の血管も動脈硬化が進んでいると考えなければなりません。心臓や脳の血管が詰まってしまうと命にかかわります。下肢閉塞性動脈硬化症のある方が十分な治療を受けない場合、**10年後の生存率は50%**にまで落ちてしまう（二人に一人が亡くなってしまう）ことが分かっています。また、足の動脈硬化がさらに進めば足が腐ってしまうこともあります。



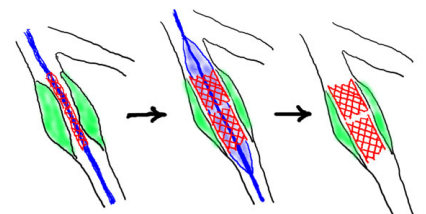
ABI検査

Q4 検査は大変ですか？

A 外来で足を触るだけで9割以上診断が可能です。
もし疑いがあれば、手足の血圧を測る検査（ABI）やMR I 検査をします。

Q5 どのような治療方法があるのですか？

A 足の血管をつなぐ**バイパス手術**のほか、血管内に**カテーテル**という管を通して風船を膨らませたり、**ステント**という金属製の細い筒を使った治療法があります。カテーテルを使った治療法の場合、患者さまの身体への負担は少ない反面、風船を膨らませて血管を広げても時間がたつとまた詰まってきたり、ステントを入れてしまうと、後にバイパス手術が必要となった場合、手術が困難になるなどの欠点もあります。



カテーテルを使ったステント治療

動脈硬化の進行は、投薬治療をしても完全に止めることはできませんので、その場しのぎの治療ではなく、患者さまの**一生を考えた治療法**を選択する必要があります。

当院では、外科である**心臓血管外科**と内科である**循環器科**とが**連携**し、お互いの知恵と技術を生かしてそれぞれの患者さまにあった**最良の治療方法**を患者さまとともに考えていきます。

市立小樽第二病院での

摂食・嚥下障害への取り組み（後編）

医療法人社団 館歯科医院手宮歯科医院 館 宏 院長



館 宏 先生

歯科医院での診療のほか、摂食・嚥下リハビリや栄養管理指導でもご活躍されています。

食事や水を飲みこむ仕組みはとても複雑で、いまだに解明されていない部分があります。また、飲みこみ運動（嚥下運動）のリハビリテーションを専門とする医師が日本ではとても少ないため、うまく飲みこむことができない方へ十分な対応がなされていませんでした。

しかし、近年の医学の進歩により、適切な診断・訓練を行うことで、食べる機能・飲みこむ機能を回復できる可能性が出てきました。

平成18年から、飲みこむ機能を回復するためのリハビリテーションが保険適応となるなど、飲みこみ運動（嚥下運動）への関心は、全国的に急速に高まっています。

飲みこみ運動の検査の一つに「嚥下造影検査」があります。これは、40%バリウムや造影剤を混ぜた食事を飲みこむ様子を、レントゲンで撮影する検査です。少量の40%バリウムや造影効果のある食事がのどを通るときに、気管に入ってしまうかどうか、のどの中に食べ物が残らないかなどを調べます。



「嚥下造影検査」

もし、気管に入ってしまったり、きれいに飲みこむことができない場合、食べ物のトロミ具合や、一口で食べる量、飲み込む時の姿勢など、それぞれの患者さまに合わせて調節し、入院中やご自宅で安全に食事がとれるように工夫します。

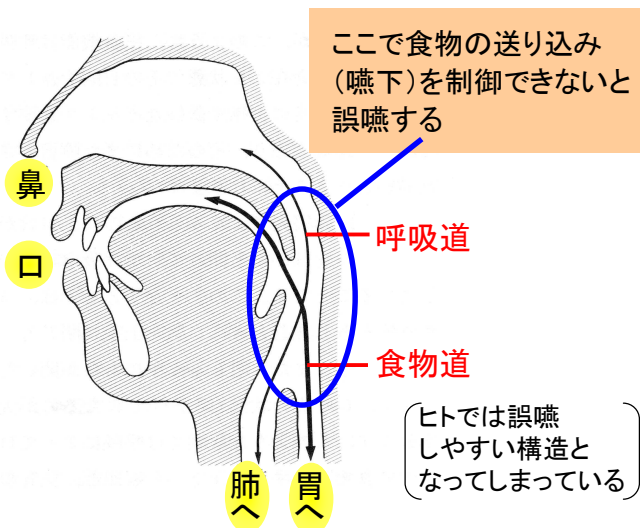


検査時間は、15分～45分ほどです。

第二病院では平成19年7月から、飲みこみ運動に障害のある患者さまに「嚥下造影検査」を行い、患者さまが「おいしく・楽しく・安全に」食事がとれるよう、取り組みを始めています。



呼吸道と食物道の交差



数字でみる「第二病院」 疾患別にみた退院患者さまの数

今回は、平成19年6～11月の6ヵ月間に第二病院を退院された患者さま1,075名について疾患別の人数と平均年齢を調べました。

当院を退院された患者さまの中で最も多い疾患は、脳梗塞。続いて前回の広報誌『しんらい（第2号）』の“ドクターに聴く”でもご紹介した脳脊髄液減少症、そして、平成18年から日帰り手術も可能となった下肢静脈瘤と続いています。

順位	病名	人数	平均年齢
1	脳梗塞	129名	72歳
2	脳脊髄液減少症	77名	42歳
3	下肢静脈瘤	64名	65歳
4	狭心症	42名	71歳
5	脳内出血	41名	74歳
6	慢性虚血性心疾患	34名	70歳
7	下肢閉塞性動脈硬化症	26名	72歳
8	慢性腎不全	24名	69歳
8	統合失調症	23名	57歳
10	頸動脈の閉塞または狭窄	22名	70歳

部門紹介 「デイケア」

「利用者、スタッフ 共に頑張っています！！」

当院のデイケアは、平成12年に開設しました。精神科外来に通院している方を対象にしています。登録者は60名ほどで、1日平均の利用者は25名ほどです。生活にリズムをつけたり、自己の可能性を見いだしたり、心にゆとりを持つことで、社会生活を円滑に営めることを目標としています。



具体的には、木工や手芸などの創作活動を行ったり、パソコンや書道・ペン字などを学んだり、喫茶室の運営も行っています。

そのほか、体力の向上や心身のリフレッシュを目的として、ミニバレーなどのスポーツや障害者作業所などの社会見学なども行っていますが、それらの年間行事は自分たちで企画しています。

また、家庭生活での不安を抱えている利用者に対しては、スタッフが訪問し、一緒に改善策を考えたり、援助したりしています。

さらに、就労を希望している利用者を対象に、会社を訪問して労働体験をさせてもらうなど就労へつなげる働きかけも行っています。



心臓・血管ドックのご案内

当院では『心臓ドック』と『血管ドック』を行っています。

健康を保つ上で、心臓・血管の病気を早期に発見し、生活習慣の見直しや適切な治療によって、発病予防・悪化防止することは、とても大切なことです。

- 心臓ドック：狭心症・心筋梗塞などの心臓病の有無を診断
- 血管ドック：血管の硬さや詰まりの程度、血管年齢などを診断

【ご予約・お問い合わせは】

市立小樽第二病院 地域医療連携室
電話（代）0134-33-4151（内線163）

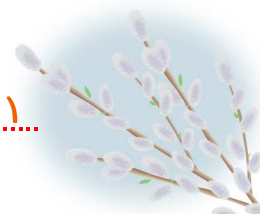


ご覧ください

市立小樽第二病院
ホームページ

アドレス

<http://www.med-otaru.jp/dai2hp/>



- ◆受付時間 午前8時40分～／午後1時30分～
 - ◆休診日 土・日曜日、祝日、年末年始
- 発行：市立小樽第二病院
〒047-0036 小樽市長橋3丁目11番1号
電話(0134)33-4151・ファックス(0134)32-6347